

国語

時間【六〇分】 配点【一〇〇点】

第1問 次の文章を読んで、後の問い 問1～7 に答えよ。

書について芸術性を問題にするということはごく普通に行われていることだろうが、私にはこの問題について確たる意見をのべることができない。もし絵画について芸術という言葉で語ることができるなら、書についても同じことができないはずはなからうと思ってみるのだが、ごく単純なところで、だわりが生じ、思考が立ちどまってしまう。つまり、絵画では、ある種の例外的な「イトナミ」を除けば、同じ個所を何度も塗り重ねるということが当たり前のこととして行われるのに対し、書では墨の塗り直しは許されないという事実には、私は両者の本質的な違いを感じてしまうからである。もともと、書でも意識的に塗り重ねをする場合も、あるいはあるのかもしれない。書と画とが相接し、重なり合っているような領域の仕事も、あるいはあるのかもしれない。しかしそれは、書の長い歴史のなかではまったく例外的な現象だろうから、私の狭い知見の範囲には入ってこない。

だが、別の見方からすれば、塗り直しがきかないということは、芸術というものをその行為態において見るときには、むしろ芸術の最も徹底したあり方としての「一回性」の精神、その「一回性」を峻烈に表現しているものということができよう。

書はその観点から見ると、芸術の王座に位置するといっても過言ではないのである。

書には「A」のような「一回性」が備わっていて、それがたぶん昔も今も書を見る人——それは潜在的には一人残らず書をする人でもある——をひきつけてやまない書の秘密なのである。

以前にも私はこのことについて考えたことがあったが、その時私の頭に浮かんだのは「B」書と「舞踏」との類似性ということだった。音楽、絵画、彫刻などにおける作品と作者の関係を考え、それを書の場合と比較してみると、後者は前者にくらべ、作った人と作られたものとの関係が比較にならないほど密接だと感じられる。これに似た関係を考えてみると、おのずと舞踏が念頭に浮かんでくるのである。

もちろん、書は、それが書きあげられた後には一つの「もの」として残るのに対し、舞踏は「瞬間」に消滅してしまうという大きな違いはある。しかし、書を書く人の心の問題としてこれを考えてみると、人を震撼するほどの書を書く人は、「もの」として残るものを書くこととして書くのではないだろう。彼らは、書くことに没頭しているとき、「瞬間」に筆先からほとばしり出て消滅してゆくおのれ自身の命の軌跡を、あたかも運動そのものに魅了されつくした舞踏家が空間に「瞬間」おのれ自身の命の形を刻みこんでゆくように、紙上に無心に彫りこんでいるだけではなからうか。

何よりもまず、舞踏家においても書人においても、一つの動作はやり直しがきかないものとして、「瞬間」に全体が通過してしまうものとして、そこに出現し、同時に完成してしまう点が共通しているのである。

その点では、書にも舞踏にも、武術にも共通したところがあるように思われる。命の発現には「一刻のユウ」もないというのが、これらの諸術に共通の心得というものである。

だからこそ、舞踏の「常住坐臥」が修行となる。どの「瞬間」をとってみても完結していなければならない——あるいは否応なしに完結せられてしまう——のが、言葉の真の意味における生の「一回性」というものであるからだ。書家とよばれる人々については知るところがほとんどないからふれるわけにいかないが、広い意味で書人とよばれる人々——別の言葉でいえば文人だったり画人だったり学人だったり道人だったりする

人々——の場合、いまのべたような意味で常住坐臥を書の実践としている人々の書が、

注2 江湖に尊ばれ、好まれるものでもあるのがほとんどである。書の二回性の背後には書の無限の繰返しがあり、スリていなければならないというのが、逆説でも何でもなく、書の魅力の秘密だからである。

たとえば、白井晟一しらいせいいちの一点の書の背後に、いったい何百、何千の同じ文字の連なりがあるかについて想像してみる。たぶんこの瞑想的な建築家の書齋には、表に出てきた一点の書と較べて何の変るところもないと思われる作がうずたかく重ねられていただろう。それでも、ある一点は可とされ、他の多くの文字は否とされたのだろう。その決定を下した作者自身の、命のほとばしりがその判断の根本にはあって、余人の介在を許さない。その点に書の神秘性がある。書が、いつてみればわれわれの眼前に具体的なものとして出現した生の神秘そのものという側面をいつもっているもの。そのためである。

注3 『切経』五〇四八巻をたつた一人で書き上げたという藤原定信の事蹟について読んだことがある。小松茂美『書のみかた』。藤原行成五代目の子孫である定信は、もちろん十二世紀日本の代表的な能書家だったが、四十歳の時から始めて六十四歳まで、二十三年かかって『切経』を写し了えたという。左大臣藤原頼長の日記『宇槐記抄』台記』に頼長みずから書きしるしたエピソードとして小松氏が書いているところによれば、いよいよ『切経』写経の大事業を了えた定信が頼長邸を訪れると、頼長は「齋戒沐浴して衣冠束帯を着用し、定信を上座に坐らせた。そしてみずからははるか下座にさがって、うやうやしく礼拝し、面接したという。『切経』を書写し了えた以上、定信はすでに仏と同じであるという思想からである。

この話を、書に対する信仰というものが生きていた時代の一つのエピソードに過ぎないといってしまうとそれだけだが、私は頼長ほどではないにしても、たとえば正岡子規と彼の書いたものすべてについて考えるとき、これと似たような尊いものを前にしている感動を覚えずにはいられない。

正岡子規は三十五歳で世を去ったが、その書き遺したものは膨大だった。しかもそれらは——彼の生きた明治の世にあつては当然だったが——毛筆で書かれた。彼が書いたものの中には、俳諧、漢詩、和歌、散文などのほかに、まさに気も遠くなるばかりの量の、他人の作の書写も含まれていた。その最大ものは、晩年の言語に絶する苦しい病床生活の中でさえ続けられた『俳句分類』だが、それ以外にも彼は、メニ魔といつていいほどに、気易さと注意力の合体した異常なエネルギーによって、多様な領域の文化的産物の引き写しと分類を不断に行つていて、それらだけでもキョウ

⑤ タンすべき分量に達している。

特にこれらの記録についていえることだが、子規はこの仕事に没頭しているとき、字の形を整えたり、その美的特質に心をわずらわしたりすることはなかったろう。ひたすら「字でも多く、速く、しかし正確に、文字を書き写すことだけが彼の関心事だったはずである。つまり達意の文字であればよいという考え方が、彼のおよそ飾り気のない、好ましい文字の流れを貫いていたはずである。

この点については、私は以前にも何度か子規にふれた文章の中で書いたもので、ここには『平規遺墨』求龍堂 第三巻の序文の中で山本健吉氏が書いているところを引いておきたい。

子規の散文が、おそろしく飾り気のない、簡潔明晰な達意の文であるように、彼の書く字も劃の明瞭な、読み易い、達意の字である。松山出身の俳家の字を較べてみると、子規だけが美用性に発した字のように見える。虚子の字には風流意識によるおのづからの崩れがあり、碧梧桐の字には専門書家意識によることさらの装飾化、造形化が見える。中略 では、子規の書蹟の面白さは一体何だろう。飾りのないその書蹟から浮かび上がってくるのびやかな好ましい人柄というより仕方のないものだ。無飾、達意の字プラス・アルファなのである。それは如何に流麗で、巧みな字を書いて、も、浮び上がってくるとは限らない。また、改まった気持ちで色紙、短尺、半折など

に書いたものより、別に何の戒心もなく書いた^{注4} 尺牘^{せきとく}などが、いつそう面白い」とがある。私は子規の字は尺牘や日記や、あるいはまた特殊なものとしては、自筆の墓誌銘や、とりわけ絶筆の三句などが好きである。」

書と人格を結びつける考え方は、たぶん古くからあり、とくに禅僧の墨蹟をきわめて重んじるようになってからの日本では、この考え方はとりわけ馴染み深いものになっている。さらに、文人画と共に文人の書愛する風潮が根強く普及してからは、書は人なりという考え方は日本人にはきわめて親しいものとなっていて、山本氏の子規の書に対する見方もそのような思想的伝統の上に立って語られているといっているだろう。

今、禅僧の墨跡についてはいざ知らず、文人の書の伝統は地を払っているといっても過言でない時代にあつて、私たちが書家ならざる書人の「書」を見るときには、どのような意味があるだろうか。私にはそれについて客観的なものの言い方はできない。しかし、私が好ましく思う書についていうことはもちろんできる。そのさまざまな要素の中でもとりわけ重要なことは、書が書を超えた何らかの目的に向けて奉仕するために書かれているときにこそ、書は最も深い輝きを発するということである。実際、病牀六尺に呻吟する正岡子規は、一字でも多く書くことができたとき、みずから命の延長と拡充の実感をありありと感じて歓喜したのだった。彼にとつては、字そのものではなく、字によって具体的に形をとって発現するわが命の舞踏の表現こそ、その歓びの源泉だったのである。

大岡信 『美を開く扉』による

注1 常住坐臥——起きているときも寝ているときも、いつも。平生。

2 江湖——世間。一般社会

3 一切経——仏教の経典を集めたものの総称。

4 尺牘——手紙。書状。

問1 傍線部 ア、イ、ロの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

ア イトナミ

- ① 少数セイエイ
- ② 要人のゴエイ
- ③ エイリを目的とする
- ④ 政権のエイゾク性
- ⑤ エイカンに輝く

イ ユウヨ

- ① メイヨの回復
- ② 卒業証書のジュヨ
- ③ 金銭をヨタクする
- ④ ヨゴを大切にする
- ⑤ 辞任をヨギなくされる

ロ スキテ

- ① 恩師のクントウ
- ② トウカクを現す
- ③ 文学にケイトウする
- ④ 現実からのトウヒ
- ⑤ 世の中にシントウする

正 キョウタン

- ① タンソクをもらす
- ② タンネンに調べる
- ③ 心身をタンレンする
- ④ キョクタンな言い方
- ⑤ 結果にラクタンする

問2 傍線部A このような「三面性」の説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。

- ① 書でも絵画でも同じように意識的に重ね塗りをする場合もあれば、書と画とが相接して重なり合っているような場合もあるということ。
- ② 絵画では同じ箇所を何度も塗り重ねるということが当たり前のこととして行われるのに対し、書ではある種の例外を除けば墨の塗り直しが許されないということ。

③ 書には、芸術という言葉のもと絵画と同様に語ることができるという側面と、塗り直しが許されず、それゆえ絵画とは決定的に違うという側面があるということ。

④ 書は書そのものとして独立して評価されることもあれば、その書を作った人との関係が密接にとらえられることもあるということ。

⑤ 塗り直しが許されないのは、書が生の一回性を表すものだからであり、同時に最も徹底したあり方としての芸術だからであるということ。

問3 傍線部B 書と舞踏の類似性」の説明として適当でないものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。

① 芸術をその行為態で見るなら、書も舞踏も芸術の最も徹底したあり方としての二期一会の精神、一回性を表現しているものである。

② 舞踏家が運動そのものに魅了されつくして空間に「瞬」「瞬おのれの命の形を刻みこんでいくように、書を書く人は書くことに没頭しているとき、「瞬」ごとに筆尖からほとぼり出て消滅してゆくおのれ自身の命の軌跡を紙上に無心に彫りこむのである。

③ 書も舞踏もやり直しがきかないものであり、そのことは芸術の最も徹底したあり方としての二期一会の精神、一回性を峻烈に表現しており、その意味で芸術の王座に位置するとも言えるのである。

④ 書も舞踏も、一つの動作はやり直しがきかず、「瞬」に全体が通過してしまふものとして、そこに出現し、同時に完成してしまふものであり、その点では武術に共通したところがあると考えられるのである。

⑤ 書も舞踏もそれを表現する者がおのれの命の軌跡を紙上に、あるいは空間に刻みこんだものであり、「瞬」に全体が通過し消滅してしまふものという点で共通である。

問4 白井晟一とその書についての記述は、何を意味するか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 一点の書が表に出てくる背後には、何百、何千の同じ文字の連なりがあるという。これは、舞踏家が何度も同じ動作を繰り返し練習を重ねることと共通しており、書にせよ舞踏にせよ、一回の表現のためには気が遠くなるほどの準備が必要だということである。

② 人を震撼するほどの書を書く人は、書くことに没頭しているとき、おの

れ自身の命の軌跡を紙上に無心に彫りこんでいるのである。それゆえ、書人の書斎にうずたかく重ねられた書は、彼の命の発現といえるのであり、そこに書の神秘性がある。

③ 一点の書が表に出てくる背後には、数え切れないほどの同じ字の連なりがある。その中から一つを選ぶ決定を下すのは作者自身であり、その判断がどのようにしてなされたかは常人にはうかがい知ることができず、それゆえに書は神秘的なのである。

④ 数えきれない書の実践の中から一点を表に出すものとして選ぶ背後には、書を書く人の瞑想があり、一点を選ぶ決定には他者が介入することができない。ここに書の神秘性があり、書がわれわれの目の前に生の一回性を具体的な形で表すものといえる。

⑤ 書人の書の背後には、書く人の日常としての書の実践があり、多くの作の中から一点を表に出すものとして選ぶ判断は書く人自身の命の発現であって他者が介入することはできない。書と書を書く人の関係は密接で、そこに書の神秘性があるのである。

問5 傍線部C 斎戒沐浴して衣冠束帯を着用し」とあるが、これは頼長のどのような思いと行動を表すものか。その説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。

- ① 大著である『切経』を写経するという大事業を成し遂げた定信に遜色のないように、居住まいを正し、左大臣としての威厳をもって接した。
- ② 仏典の集成である『切経』を写経し了えた定信は仏と同じであるという思想から、仏の前に出るものとして身を清め、服装を整えた。

- ③ 生きながら仏たらしめとして『切経』を写経した定信の信仰心に敬意を表し、みずからも正装し、定信とともにうやうやしく礼拝した。
- ④ 書に対する信仰が生きていた時代らしく、『切経』を写した定信はすでに仏であると考え、居住まいを正し、定信に教えを請う姿勢を見せた。
- ⑤ 仏の教えである『切経』と、それを写経した定信を同じく尊いものと見なし、信仰心を表すために身を清め、質素な服装に身を包んでへりくだった。

問6 筆者は子規とその書についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 子規は俳諧、漢詩、和歌、散文、さらには他人の作の書写まで、厩大なものをひたすら書き遺した。その字には技巧や装飾がなく、ただ達意の文字であればよいという考えが貫かれており、そこに尊さ、彼の人の好ましさを感じられる。このことには『切経』を一人で写経した藤原定信を藤原頼長が尊んだことに相通じるものがある。

- ② 書と人格を結びつける考え方は古くからあり、『切経』を写経した藤原定信がその時代に高く評価されたのもそうした考えから来るものである。しかし、子規の書はひたすら文字を書き写すことに集中した結果として遺されたものであり、それゆえ、子規の人の人柄というよりも、むしろ書に費やした異常なエネルギーが伝わってくるのである。
- ③ 子規の書には、風流意識や装飾化、造形化とは「線を画した飾り気のないのびやかさがあり、それは彼が何の戒心もなく書いた尺牘において顕著である。この子規の書が尊ばれ、好まれるということは、日本人の中に書

家ならざる書人の書を愛する風潮が根強く普及していることの表れであるといえる。

④ 子規の字は、他の俳人の字とは違って、飾り気がなく、明瞭で読みやすい。書は人なりということを見ると、この子規の書が好ましいものとして広く尊ばれたということは、多くの人が子規のような考え方、つまり、字は実用性に発したものであり、尊重すべきは字の形ではなく書を書くことそのものであるという考え方に共感していることの表れである。

⑤ 『切経』を一人で写し了えた藤原定信を藤原頼長が尊んだように、かつては書に対する信仰が生きていたが、子規の時代にあつては、書は人なり、つまり、書は信仰の対象というよりそれを書いた者の人柄を表すものであるとされた。それを考えると、子規の明瞭な達意の書は、彼自身の飾らないのびやかな人柄を表すものとして人々に好まれたといえる。

問7 筆者にとって好ましい書とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 筆先が動くその「瞬のために、書家が常住坐臥を修行とし、命の発現として遺したものとしての書。
- ② 芸術としての書そのものを目的とする書家ではなく、書を通じて言葉を遺そうとする文人の書。
- ③ 書として遺すために書かれたのではなく、書く人の生の「瞬」が書として現れたといえるような書。
- ④ ひたすら「字でも多く、早く、しかし正確に、文字を書き写すことだけに心をくだいて書かれた書。

⑤ 藤原定信が書き遺した『切経』のように、書を書で止まらせず信仰や芸術の域に高めるような書。

第2問

次の文章は、筆者（オダ君）が「大生の同行者」と呼ぶ連れ合いとその両親とともに温泉地を訪れたときの「場面を描いたものである。

大生の同行者」の両親は韓国の済州島出身で、若い頃、日本に渡り、兵庫県神戸市で生活している。文中で母と父は、それぞれ オモニ 韓国・朝鮮語で母の意」、アボジ 同じく父の意」と呼ばれる。これを読んで後の問い 問1～7 に答えよ。

一

さて、翌日。――

年寄りには案外退屈するものだ。一泊の予定でやって来たので、年寄り二人、次の日はお湯に入りびたりでゆっくりしてくれるものと思惑していたら、彼女たちはまことにつまらなさそうな顔をしてくれる。だいたい若いときから働きづめに働いて来たお二人、ただ無為に時間をつぶすことは苦手らしい。そう言え、わたしたちのアパートにやって来るときにも、お二人はいろんなことでしょっちゅうからだを動かしている。

ことのついでにわが家にやって来るときは彼女たちの働きぶりを書いておこう。まず、アボジの口ぐせだ。

なんでまた、オダ君、きみのところにはこんなにたくさんのお本があるのや。」彼はそこらにちらかっている本やら雑誌やらを見まわして、おもむろに言う。
老^注1 ゲーリー・クーパー、そう言うときには、哲学者のおもむきがある。いや、

A 哲学者などというよりも少し実人生に即して、まさに「思想家」である。

本など読まぬ、本など不要な、おそらくもつと本質的なところで考え、思索している「思想家」である。彼の生まれた済州島の村には、こういう「思想家」が教える「書堂」があつたにちがいない。いや、オモニの父親はまさにそうした村の「思想家」だった。

佳むとこが狭うなってしまうやないか。」

大邸宅に住んでいるわけではないので、これはまったくわたしも同感だが、ここであんなにいたりすると、

そんなら、オダ君、みんなチリ紙交換に出したらええ。」

と言ひ出しかねない。

このいつかのことは、わたしは、

アボジ、洋服屋に行つてみイ。ようけ生地が置いてあるやろ。本は洋服の生地みたいなものや。」

ととつさに口をついて出たセリフで応じたが、このセリフはどうも苦しまざれだ。それでB 結局、不要な本や雑誌はチリ紙交換が何かに出すことにしたが、このわたしの決定にはオモニの、

なんでまた、こないに他人の書いた本ばかり並べとるんや。」

との本棚を眺めまわしての感想が大いに影をおとしている。なるほど、そう言えはそうである。わたしたちは、なぜ、本にしろ絵にしろ、そんなに他人がつくったものばかり並べて、それを眺めてよろこんでいるのか。絵など、自分で描いて壁にかけとけばよいのではないか。手作りの味が尊ばれる世の中、食い物は自分の手でつくって食べ、詩は自分で書き、絵も自分のこの手で描く——これがよろしいのではないか、そうあるべきではないかと自問自答しているうちに、その思想を目のまえで実践してみせるようにアボジは黙ってわたしの足元の本やら雑

誌やらをたばね出した。その速いこと、段どりのいいこと、アツという間に本と雑誌の山を適当な束にたばね終わると、どこからか探し出して来たヒモでみごとにくり上げた。

わしはいろんな仕事をしたで、荷づくりの仕事もようやった。」

ということになって、これには「言もない」。

さて、そのあいだ、オモニはどうしているのか。この夫婦のおたがいの独立は徹底していて、アボジがそんなことをやっているのは自分でやりたいことをやっているだけのこと——とあつてか、アボジの仕事は一切手伝わずに、ご自分は自分で、この方とにかく知的好奇心に満ちあふれていてわたし本やら雑誌やらをひつくりかえしてC お読みになる。と言つたつて、字はまるつきり読めないのだから、本や雑誌のなかに出て来る写真や絵を眺めていると言つたほうがよろしいが、彼女の直感文字が読めないの逆にかえって研ぎすまされていて、略この人、わるい人やで」とか、これは戦争の最中の写真や」とか、的確に対象を見抜く。ただ写真や絵が出て来ない、文字しか出て来ない本や雑誌の場合、あるいは写真や絵が出現してくるまでのあいだは、ときどきかさに手に持っていたりする。

いつか、オモニがわたしの本棚を少しばかり整理したことがあつたが、そのときには本のサイズですべてを分類するというすてきなことをやってのけた。すてき」とわたしはここで書いているのは、何も皮肉な意味あいを込めてのことではない。事実、オモニの整理の結果を見て思ったことであつたからだ、もう一度、同じ思いを持ったのは、わたしたちが西ベルリンにくらしているあいだイギリス人の友人に貸していた神戸のわたしの仕事部屋に帰国後はじめて行ったときのことだ。散らかし放題に散らかしていたその仕事部屋をわが異国の独身の友人はタダで借りていたのだが、西洋の独身男は日本の独身男とちがって身ぎれいに

くらすものなのだ。散らかし放題だったのがみごとに整理整頓されていてこれが同じ部屋だったのかとおどろいたのだが、さて、本棚の本はすべてサイズによってまことにすてきに分類されていた。オモニ同様、彼は日本の文字は漢字、カナすべて読めなかったのだ。

二

由「行ってみようか。」

わたしは言った。年寄り二人のいかにも退屈しきった顔を見ているうちに口をついて出た苦しまぎれのことばである。

由「どこの山や。」

オモニは当然の質問をする。アボジはさつきからのタバコをつづけている。

大山。……そういう大きな山があるねん。」

もちろん、頂上まで行けるものではない。ただ、途中のお寺までのバスの便がある。そのあたりまでも、行ってみるか。――

名山……有名な山や。済州島で言うたら、ハル山みたいなもんや。」

彼ら二人はまさにそのハル山のふもとで生まれ育った。しかし、オモニとアボジの顔には、べつにそのことばで遊志動くとなったけはいは見えない。

「ここで日本人相手なら、志賀直哉先生の『暗夜行路』の話でもやってのけるとろだが、先方はそんなことを言ってみたところで、それ、何や、シガとかいう人は」と言い出すだけにきまっている。

しかし、彼女の故郷の名山の名は、やはり、効果をべつのかたちで持っていた。

まうリユックサクにお弁当入れて、登って行きはったで、何人も連れてな。」
オモニの突然のことばでわたしは、突然、

誰がや」

と訊ね返した。

アボジや。うちのアボジ。……」

とたんにわたしの眼に浮かんだのは、チョンマゲを頭の上にのせた「書堂」の思想家の顔だ。その色あせたセピア色の写真を、オモニはいつもハンドバッグのなかに入れて持ち歩いている。

朝鮮の村の寺子屋――「書堂」で教えていた彼は、ときどきお弟子さんを連れ

て山――済州島の名山ハル山に登ったのだと言う。オモニがオモニのアボジの話をするときには、ありありと尊敬の気持ちで顔全体に出て来る。アボジへの尊敬というより、思想家への尊敬である。あるいは、一切の知的なもの、思想的なものへの尊敬である。わたしはこういう純にして感動的な尊敬をこのところ人の面上にあまり見たことがない。

アボジは何でもできはった人や。」

オモニの話は彼女のアボジのハル山登りからひろがる。ハル山へは馬でも登って行ったというのがきつかけだ。彼は「書堂」で教えていたが、ただ「四書五経」を講じて日をくらしていたのではないらしい。よく働いたし、なんでもよくできた。たとえば、魚釣りもできた。それもそこの小魚を釣って来たのではない。マグロのサシミなど、彼が釣って来たのでつくって食べた。少し大きな気もするが、オモニの言う話だ、信じることにしよう。

オダ君はサカナ釣るんか。」

とそれまで黙り込んでタバコをすいつづけていたアボジが横から口を出した。
釣らんか。」

馬に乗るんか。」

乗らんか。」

アボジの老グリークーパーの顔を見ると、この男、何にもだけへんなという表情がありありと見えてきた。もちろん、オモニもその表情を浮かべてい

る。ここでハタと気がついたのは、ササンカ「思想家」という存在、ただの口舌くぜつの徒ではないということだ。X——それが、ササンカ「思想家」の、ササンカ「思想家」たるゆえんであること、どうやらそうであるらしいことがわたしにもおぼろげながらつかめて来た。どうにも、ハタ色がわるい。

しかし、オモニは謙虚であった。わたしの無能力をそれ以上顔つきでなじるかわりに、

わたしも字が読めへんな。」
と言いつ出した。

わたしは針仕事は誰にも負けんぐらい上手やし、泳ぎも上手やけど、何でもかしら、字はならうココロがなかったんやな。」

朝鮮語にそういう表現があることはあとで「大生の同行者」から聞いたが、この言い方はなかなかいい。

そうか、そうか、針仕事や泳ぐのをならうココロはあったんやけど、字をならうココロはなかったんやな。」

とわたしは急場を救われたココロであとをつづけた。

そうやで、何でなかったんやろ。ほんまに……。」

とオモニは懸命に考える表情になった。しかし、それにしても、わたしもサシミのためのマグロを釣るのをならうココロも馬に乗るのをならうココロも何で持たなかったのだろう。字を書くココロも本を読むココロもマグロを釣るココロも馬に乗るココロも十分に持っていた偉大な「思想家」（「思想」とはそもそもそういうすべてにわたってのココロではないのか。「思想家」とは、もちろん、そのすべてにわたってのココロの持ち主のことを言うのだろう）のアボジが死んだとき、オモニはよほど悲しかったにちがいない。わたしがわざわざそう訊ねる気になったのは、いつか、オモニが、父親が死んだときには、人は、モノサシの長さだけ

涙が出るもんや」と言っていたからだ。

この意味はお判りだろうか。つまり、決められた通り、通りいっぺんに泣くということだ。母親が死んだときには、どうか。

持った※シヤクがズルズルになるもんや。」

葬礼の行列の先頭に立つ長男のシヤクがナミダで濡れてズルズルになる——それまで泣く、心底から泣く。

うまいことを言うものだとは私は聞いていて感心したが、さて、オモニのアボジが死んだときのオモニのナミダはいかなるものであったのか。モノサシか、ズルズルになったシヤクか。

「わたしは女やろ。シヤクなんか持つてへんがな。」

例によつてオモニの答えは明確、そして即物的にアッサリとさわやかであった。

小田実 『オモニ太平記』による

注1 ゲーリー・クーパー——アメリカの二枚目俳優。文章中のアボジは、ゲーリー・クーパーに顔立ちが似ているという。

注2 書堂——日本の寺子屋のような民間の教育機関。

※体育進学センター注釈 この場合の「シヤク」とは、笏しやくのことを指すと思われる。笏とは木や象牙等を材料とした細長い形の装身具で、日本であれば、男性が束帯、皇族、貴族の歴史的正装を着用する際に手許に持つ物である。たとえば、聖徳太子の肖像画に描かれている。笏自体は中国発祥の物であるから、中国文化の強い影響下にあった朝鮮半島や済州島でも男性の装身具として用いていた習慣がある。

問1 傍線部「アッ」の本文中における意味として最も適当なものを、次

の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

ア おもむろに

- ① 急に思い出したように
- ② 思いがけず突然に
- ③ 所在なげな様子で
- ④ 落ち着いてゆつくりと
- ⑤ 出し抜けに

イ これには 言もない

- ① 多くの仕事をした者は多くの技能を身に着けるといふ事実にならずには
かない
- ② アボジがいろいろな仕事を通じて多くのことを身につけたことは疑いな
い
- ③ 本や雑誌を片付けていくアボジの手際によさにはただ驚くばかりで言葉
もない

- ④ 本や雑誌がアツという間に片付いていくので口を差し挟む暇もない
- ⑤ 自分では本や雑誌を片付けられなかったことについて全く弁解できない

ウ ハタ色が悪い

- ① 形勢がよくない
- ② 気分が優れない
- ③ 理解が得にくい
- ④ 意味が明確でない

⑤ 自分にはできない

問2 傍線部A 哲学者などというよりももう少し実人生に即して、まさに『思想家』である」とあるが、ここから筆者がアボジについてどのような思いを持っていると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① アボジは本など読まない生活をしてきており、そういう意味では哲学者に劣るのかもしれない。しかし、働き、その中で生きる知恵を身に付けてきたアボジは、実人生を生きたと言えるのであり、それは人生の本質的なところで思索する思想家の生き方そのものであって、哲学者に勝るとも劣らない人生である。

② 哲学者にとって本は思索のため欠くべからざるものであるが、思想家は本など不要な、もっと本質的なところで思索する存在である。生活のために地に足をつけて働くアボジの生き方は思想家の生き方であり、そのアボジにとってみれば、本があふれる筆者の部屋は理解できないものなのかもしれないと思っている。

③ 哲学者が学究の徒であるのに対して、思想家は思想を持ち、思想に基づいて現実の生を生きる知恵や技術を身につけた者である。生きるために様々な労働をして、そこで実質的な技術を身につけてきたアボジは本質的なところで生きていくのであり、まさにその思想家に通じるところがあると思っている。

④ 働きづめに働いてきたアボジには、本を読む時間はなく、まして哲学に触れる余裕などなかったにちがいない。しかし、働くことを通じて知恵と

技術とを身に付けてきたアボジの生き方は、思索だけでなく実践としての生活を重んじる思想家の生き方であり、そこには哲学者を凌駕するものがあると思っている。

⑤ アボジのそれまでの人生は、一見、哲学や思想とは無縁であるように見える。しかし、働くことの本質的な意味を知り、無為に過ごすことをよしとしないアボジの生き方は、彼の生まれ育った故郷の思想家の思想の実践と言えるのであり、その意味でアボジはまさに哲学者であり思想家であると思っている。

問3 傍線部B 結局、不要な本や雑誌はチリ紙交換か何かに出すことにした」とあるが、それはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① オモニの言葉はおどけているようだが真実を含むことを理解し、さらにアボジの行動がその真実を実践するものであることに気づき、自分もそう生きようと決心したから。
- ② 本の多さに驚くアボジに対して洋服屋に生地がたくさんあることになぞらえて説明しようとしたが、オモニの言葉によって洋服屋のたとえが適切でないことに気づいたから。
- ③ オモニの言葉によって、人は他人のつくったものに満足するべきでなく、自分の力で作ったもので生きていくべきであることに思い至ったから。
- ④ オモニの言葉に納得できるところがあり、そこから生き方というものに思考を巡らせているうちに、アボジが実際的な生活技術をもって素早く片付けてしまったから。

⑤ 洋服屋が洋服をつくるために生地をたくさん持っていることと、文筆家である自分が本をたくさん持っていることは、本質的に違うということに気づいたから。

問4 傍線部C お読みになる」とあるが、この表現によってどのようなことが表されているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① お読みになる」という謙譲語を用いることで、知的好奇心に満ちあふれてはいるが、文字が読めないオモニのことを温かい目で見つめる筆者の気持ちを表現している。
- ② お読みになる」という謙譲語を用いることで、文字は読めないが知的好奇心旺盛に本を眺め、研ぎすまされた直感でものごとを判断するオモニに対する敬意をそれとなく表現している。
- ③ お読みになる」という謙譲語を用いることで、文字は読めないが知的好奇心を忘れず、本を手取るオモニの態度に対する筆者の気持ちを謙虚に表現している。
- ④ お読みになる」という尊敬語を用いることで、文字が読めないオモニが研ぎすまされた直感で的確に対象を見抜くことを社会に対する皮肉を込めて表現している。
- ⑤ お読みになる」という尊敬語を用いることで、文字は読めないものの知的好奇心旺盛に本を眺めるオモニに対する筆者の敬意をユーモラスに表現している。

問5 空所

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 彼は思想を持ち、それゆえに何でもできる
- ② 彼は様々な能力の根本に哲学を持っている
- ③ 彼は思想に基づき、何をなすべきかを決める
- ④ 彼は美人生の中に哲学を見つけた
- ⑤ 彼は行動し、そして行動に思想を求める

問6 オモニの自分の父親に対する思いはどのようなものか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① *書堂の弟子を連れて故郷の名山ハル山に、時には馬でも登る父親の姿を誇らしい気持ちをもって覚えていた。
- ② 学問に励み、思索にふけるだけでなく、よく働き、なんでもできた父親の姿はいつまでもオモニの中に生きている。
- ③ オモニは読み書きができず、それゆえ思想を尊ぶことはできなかったが、*書堂の思想家である父親を敬愛している。
- ④ 生きること全てについての思想を持ち、いろいろなことができた父親の思想家としてのあり方を正しいものと信じている。
- ⑤ 字をならうココロが持てなかったオモニだが、それでも思想家の父を敬い、知識や教養を尊重する気持ちを持っている。

問7 傍線部D わたしは女やろ。シヤクなんか持ってへんがな」とあるが、筆者はこの言葉をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① モノサシとシヤクは悲しみの深さを表すたとえにすぎないのに、悲しみの深さを問うた筆者の問いかけにオモニはシヤクを持つのは男の役目だから自分はシヤクを持たない、つまりシヤクが濡れるほど泣くことはないと言った。それはオモニの学のない表れであり、愛すべき単純さであるにとらえている。
- ② 敬愛してやまない父親が亡くなったときの悲しみはいかばかりであったか、通りいっぺんの悲しみではなかったらうという思いで聞いたのに、オモニの答えはある意味で問いからずれた即物的なものだった。筆者はその答えに、オモニのこれまでの生き方と人柄を感じ、好ましいものととらえている。
- ③ 父親が亡くなったときには、モノサシの長さだけ、母親が亡くなったときにはシヤクが濡れるまで涙が出るという表現は、父親よりも母親を慕う子どもの気持ちを表すものである。女である自分はシヤクを持たないというオモニの答えは、こころした表現とは違って、父親の死を悼む気持ちが強かったことを言っているととらえている。
- ④ 父親を尊敬し、慕っていたオモニが父親の葬礼のときに多くの涙を流したことは想像に難くない。筆者はそのことを感傷的に語るのではなく、葬礼でシヤクを持つのが男か女かという即物的な話に変えて答えるオモニの言葉を、あつさりとした、さわやかな人柄の表れだととらえている。
- ⑤ 父親を失った悲しみは、シヤクを濡らすほどの涙を流すようなものであったに違いないのに、オモニはその悲しみに触れるのではなく、あえて自分では女だからシヤクを持たないという言い方をした。筆者は、この言葉を、

悲しみを明るく覆ってしまうオモロのさわやかさの表れだととらえている。

※体育進学センター注記 試験時には該当箇所を「書壇」と表記していたが、これは本文内容を踏まえるなら「書堂」と表記すべきであった。大学側の明らかな誤植であると思われるので、ここではすべて「書堂」と改めている。ちなみに「書壇」とは「文壇」と同様に、書家の社会に対する意味をさす。

体育進学センター

【解答】

第1問

- 問1 (ア) ③ イ ④ ウ ⑤
 問5 ② 問6 ① 問7 ③

第2問

- 問1 (ア) ④ イ ④ ウ ①
 問2 ③ 問3 ④ 問4 ⑤ 問5 ①
 問6 ③ 問7 ②

【解説】

第1問

- 問1 子 宮み ① 精銳、② 護衛、③ 宮利、④ 永統、⑤ 栄冠

- イ 猶予 ① 名誉、② 授与、③ 預託、④ 予後、⑤ 余儀

- ウ 透けて ① 蕪陶、② 頭角、③ 傾倒、④ 逃避、⑤ 浸透

- エ 極端 ① 嘆息、② 丹念、③ 鍛錬、④ 極端、⑤ 落胆

―選択肢方式の漢字問題こそ、設問箇所のみならず選択肢の漢字もすべて一度書いてみる習慣をつけるべきである。

- 問2 説明として適当なもの」 文中より同意表現を抜き出し、正確に言い換える。指示語が指すものを前述内容から抜き出せばよい。この場合、二

面性」という語がカギとなる。つまり、書には対照的な 歪反対の 性質があるということである。第一段落を見よ。書と他の芸術との共通性について述べられた後、書の 特殊性 が述べられている。この記述を正確に言い換えたものが解である。

- 問3 傍線部に続いてこの 類似性 がどういふものかについて筆者の考えが

述べられている。この箇所のまとめとして 適切ではないものが解である。ただし、類似している」ということは、当然 違い があるわけがこの点を踏まえなければ正解は見えない。―⑤ 書も…消滅してしまう」が誤り。そもそも 書 は モノ 物体 である。形があるものなので書は必ず物体が存在し続ける。

- 問4 何を意味するか」 ①これもやはり 文中の同意表現を抜き出し、言い換えよ」ということ。結論を言うと、傍線を含む 段落をまとめたものとして正確なものが解である。その決定を下した筆者自身の…以下の一文をよく見よ。この一文を言い換えたものが⑤の選択肢である。

- 問5 傍線を含む一文を見よ。さらに、次の文が時間経過を表す接続語 そして…つながっている。この文を見よ― 定信を上座に坐らせた― 上座 ①上席、つまり、特に敬意を払う対象となる客人に座ってもらう場所のこと。うやうやしく礼拝 らいはい」し―とくに仏をうやまい、合掌すること らいはいする」という。設問を見よ― 頼長のどのような思い…を表すものか。段落最後の文を見よ― 定信はすでに仏と同じであるという思想…。以上、同意表現が解である。

- 問6 正岡子規のエピソードは、直前の藤原定信のエピソードを補う意味で示されていることに注意したい― 私は頼長ほどではないにしても、たとえば正岡子規と彼の書いたものすべてについて…これに似たような…感動を覚えずにはいられない―つまり、頼長が定信を尊んだことと、筆者の子規に対する感動とは 相通する」のである。

- 問7 本文記述と矛盾する内容のものは、解とはならない。これは鉄則である。

- ① 書家が…命の発現として遺したものである」としての書―書家を主語として

第2問

問1

ア 漢字で書くと 徐に。こうすると意味が分かりやすい。イ 設

問を見よー 本文中における意味として…ー 単なる辞書的な意味のみな

らず、文中で 具体的にどういう文脈でこの語が出て来たか が重要。以下本文よりー ㊦ そうあるべきではないかと自問自答しているうちに…ア

ボジは黙って…本やら雑誌やらをたばね出した。その速いこと、段取りのいいこと、アツという間にたばね終ると…くくり上げた ㊦ しは…荷造りの仕事もようやった』ということになつて…ー 筆者はいったん片付ける

ことを決めたが、あれこれと考え出した。 ㊦ 時間がかかるー アボジが片

付けだしたが、その速いことー アツという間に片づけ終了。つまり、

とにかく早いので、グズグズしている私は追いつくことが出来なかったの

だ。選択肢の アツという間、暇もない』というのが決め手。 ウ ㊦ ハ

タ色』のハタというのは 旗』のことである。降参を示す旗の色は白であ

る 白ハタをあげる＝降伏、降参。白旗があがるのも時間の問題ということ。つまり、もうすぐ負けそうだということ。単純な語彙の問題である。

いる点で誤り。白井晟一も藤原定信も、正岡子規も 書家』ではない。白井は建築家、定信は政治家、子規は俳人である。

② 書を通して言葉を遺そうとする文人の書』ー 文人に範囲を限定しているところが誤り。理由は右に同じ。

④ 単に文字を残すことを評価してはいない。遺された書から書き手の命の発現』を感じ取ることが出来なければ意味がない ㊦ 筆者は言う。

⑤ ㊦ 信仰…の域に高めるような書』ー 信仰というくだりが誤り。白井にせよ子規にせよ、信仰の対象ではないが高く評価しているから。

問2 結論を先に言うならば、傍線部を含む 一文 およびその前後の記述が対

比の文型』となつてることが分かっているかどうか問われている。具体的にいふと 哲学者と思想家』との意味上の対比であった。この対比を

生かした選択肢はどれか。本文では ㊦ 哲学者… いや、…まさに思想家である。』となつている。 ㊦ 解は 哲学者が…であるのに対して、思想

家は…』となつている。設問を見よー どのような思いをもっているか

㊦ 思いを表しているものはどれかー 単純な同意表現の問題である。

問3 傍線を含む 一文 全部を見よ。傍線に続いて以下のように書いてあるー ㊦

が、この決定にはオモシロい…感想が大いに影をおとしている。なるほど、そういうばそうである。…自問自答しているうちに…ヒモでくくり上げた

ー チリ紙交換に出すには、本や雑誌を荷造りした状態でなければ受け取ってくれない。つまり、こうなつたからには、あとはもう出すしかない状態

にまでなつていなければならない。したがって、荷造りの終わっている④が正解となるわけである。

問4

結論を言うならば、たとえ義理の両親とはいえ身内に敬語を使うのは

へんなのである。そしてへんだから笑いが起こる。ちょっとした違和感が面白いのだ。また、本やら雑誌を逆さに見たところで、内容がわかるもの

でもない。古典的なギヤグにしかない。しかしギヤグはギヤグである。

やっぱりオカシイのである。これをユーモラスと言わずして何というか。

だいたい、笑いを解説することほどつまらんものはない。

問5 文中における ㊦ ダッシヨには 一定の用法があることを知ってお

きたい。およその意味は そして、 つまり、 それで など時間経過

や議論の展開を表す接続語と同等の機能を果たす。これに従うと…それが 『思想家』の 『思想家』たるゆえんであること ㊦ X ㊦ という意

味上の等式ができる。ここで「思想家」がどのような存在であるのか、文中の表現をみていけばよい。総じて「思想家」は知識だけではなく行動を伴う存在として描かれている。しかも、その行動は広範にわたる――何でもできる」のである。

問6 ③…「思想を尊ぶことはできなかった」という記述が誤り。片づけのくだりをもう一度読み返してみよ。オモニは「本を読もうとして」いる。これは、アボジが本に一切興味を示さず荷造りにとっとと取り掛かっていることとの対比となっている。また、自分が読み書きの出来ないことについて謙虚にとらえていることも、本文中にははっきりと示されている。その上で設問をよく見よ――排除題である。

問7 傍線部が「問いに対する答え」になっているということを改めて意識せよ。では、どういう「問い」を筆者はオモニにしたのか――「オモニの涙はいかなるものであったのか。モノサシが、ズルズルになったシヤクか――端的にいうと、筆者は「そらあものすごい量の涙流したんやろ?」という意味のことを、モノサシかシヤクか」どちらも涙の量を表す表現」と「程度」の比較のかたちで尋ねたわけである。オモニはその「程度」には答えていないし、オモニが即物的であり、それが「すてき」だということとは、前半部の本棚の整理のくだりでも触れられている。解は同意表現。

体育進学センター